

携帯電話とコマーシャルイズム

藤森 猛

「司机」と「手机」

九七年の年末、天津市に一月ほど滞在した。天津に到着した夕方、タクシーに乗って宿舍まで向かった。乗ってしばらくしてから、ポケットベルの鳴るような音が聞こえたかと思うと、「司机」（タクシーの運転手）が携帯電話を取り出して、ハンドル片手に通話を始めた。市街はちよど夕方のラッシュアワーの時間帯であり、運転は大丈夫かと、冷や汗ものであった。通話が終わった後に、その携帯電話は本人の持ち物かと尋ねると、運転手は環を切ったように中国の電話事情などを次々と語りはじめた。中国語で携帯電話は「移动电话」、「携帯電話」、「大哥大」と呼ばれるが、最も一般的な名称

は「手机」のようである。さて、この運転手によると、わりとポピュラーな携帯電話が「摩托罗拉」（MOTOROLA社）であり、同僚が「飞利浦」（フィリップス社）の携帯電話を二千元（約三万二千円）程度で購入すると語った。

さて車は交差点を左折しようとした時に、突然、交差点で公安の人に大声で呼び止められた。運転手は血相を変えて車を飛び出し、たくさん車のや自転車が渋滞しているのも構わず、公安の人に猛烈な抗議をした。私は車の中で二十分ほど待たされたが、目を覆いたくなるような大渋滞になったことは言うまでもない。結局、運転手は左折禁止の所を曲がろうとしたことで「罰款」（罰金）を支払うこ

とになったらしい。宿舍に到着してから、その運転手は、「名片」（名刺）を渡し、「いつも安全運転であるから、北京などにタクシーで行くときはまた電話をして呼んでください」と語った。果たしてその名刺には「电话」（会社の電話）・「传真」（会社のファックス）・「宅电」（自宅の電話）・「手机」（携帯電話）・「BP」（ポケットベル）の五種類の番号がぎっしりと並んでいた。

現在の中国においては、「手机」と呼ばれる携帯電話と「呼机」・「寻呼机」あるいは「BP机」・「B机」・「PB机」と呼ばれるポケットベルが街に溢れている。天津の「咖啡馆」（喫茶店）でコーヒーを飲むとき、「麦丹劳」（マクドナルド）でハンバーガーを食べる時など、容赦なく携帯電話やポケットベルの音が鳴り響き、大声で話す中国の人に出くわすのがしばしばであった。また日曜日、アメリカの



天津市内のポケットベル・携帯電話販売店

サスペンス・アクション映画「特工狂花」（邦題「ロンゲ・キス・グッドナイト」）を市内の繁華街「濱江道」の映画館に見に行った。

上映中の劇場内でポケベルの音が何回か鳴り、果たしてそれは映画のシーンに出てくる携帯電話の音なのか、または映画館の観客の誰かが持っている携帯電話の音声なのか区別できなかった。

「电视台」と「电视剧」

天津にきてから、朝晩の楽しみは「电视」（テレビ）となった。テレビチャンネルはまさに「百花齐放」であり、二十四時間にわたってテレビ放送が楽しめる。天津のテレビチャンネルは、「中央电视台」（中央テレビ局）が全部で八チャンネルで、そのうち「电影频道」（映画専門チャンネル）、「文艺频道」（文艺専門チャンネル）、「体育频道」（スポーツ専門チャンネル）などがあり、例えばテレビで

劇映画を朝から晩までみる事が可能となった。また地方局として「天津电视台」が全部で三チャンネル、「北京电视台」も全部で三チャンネルあり、これに「天津有线电视台」などの有線放送と「山东电视台」などの衛星放送番組も加えると、おびただしい数のチャンネル数となった。中国のテレビ放送（白黒）の始まりは一九五八年であり、七三年にカラーテレビの本放送が開始されたことを思うと、わが国以上に、中国におけるテレビ放送事業普及のテンポが速かったといえる。

さて、天津で様々なテレビ番組を見た中で、日本のテレビ番組もたくさん目にする事ができた。中国において、日本のテレビ番組は、特に若者を主人公とする恋愛ドラマと、子供向けのアニメーションの人氣が高い。改革开放以後はドラマ「おしん」のテレビ放送が爆発的な人氣となった後は、

天南地北

山口百恵の恋愛ドラマ『赤い……』シリーズが高い視聴率をマークした。「山口百恵」は、現在でも中国のテレビ雑誌や映画雑誌では歌手ではなく「女演員」（女優）として紹介されている。また堀ちえみ・風間杜夫がかつて主演した恋愛ドラマ『スチューデス物語』は八八年に中国で『空中小姐』の名で放映され、人気を呼んだ。九四年の『奥特曼』（ウルトラマン）の大ヒットなども記憶に新しい。今回、天津のテレビ放送の中では、六〇〜七〇年代に日本で放映された『金メダルへのターン』などのスポーツ根性ものドラマや、『ジャングル大帝』などのアニメーションを童心に戻った気持ちで観賞した。なお中国で放映される外国の番組はすべて中国語による吹替えとなるが、吹替え俳優（声優）の質の高さには驚かされた。

また中国のテレビドラマは「电视剧」と呼ばれる。ある中国のホー

ムドラマでこのようなシーンがあった。親子三人で暮らす家に祖父・祖母が訪ねてきた。一家三代が団らんする部屋では「空調」（クーラー）が効き、大型の「彩电」（カラーテレビ）と「冰箱」（冷蔵庫）が揃っている。小さな子どもは祖父母のためにダンスを踊り、若い奥さんは編み物の手を休めて携帯電話で友人とおしゃべりを楽しむ。ご主人は花柄のエプロンをして、自分の両親のために料理の腕を披露する。これは中国の経済状態が「小康水平（まずまずの状態）」からさらに上昇し、特に都市部の生活レベルが急速に豊かになりつつある象徴のようであった。また多くの日本のテレビドラマが中国においてヒットするのは、現在、中国の人々が望むライフスタイルが、七〇〜九〇年代に至る時期に制作された日本のテレビドラマの中において描写されているためなのかもしれない。



天津の繁華街「滨江道」



天津市市内電話局前の
カード式公衆電話

「広告」と「手机」

中国のテレビ放送におけるコマースは、七九年に「上海電視台」が中国最初のテレビコマースを放映したのが最初である。今回、天津でテレビ番組を見ていると、コマースの多さに改めて驚くとともに、特に食品・薬類・日用品・家電製品等が激的な販売競争になっていることを感

じた。また、テレビコマースの一つとして「电视直销」(テレビ直販)というテレフォンショッピング番組が放送されていた。テレビ視聴者は、テレビを見て、購入したいと希望する品物を電話を通して申し込みをするものであり、わが国や欧米では馴染みの深い商品販売方法である。番組では「電脳按摩椅墊」(電気按摩椅子)などの健康関連機器が次々と紹介され、中国の消費の多様化を物語るようなテレビコマースであった。

また天津ではテレビコマース以外にも、電話を使用した様々な商品販売方法に出会った。例えば路上で、外国人向けの中国語家庭教師の売り込みの広告を配っているのを何度か見かけた。そのチラシには、「我々……家庭教師協会は、中国語のレベルが高く、……経験豊富なプロの先生方が数多くおります。……まずは我々に連絡

ください」と中国語、日本語、英語、韓国語で書かれていた。チラシの最後には電話番号がいくつか書かれ、すべて「BP」と記してあった。

またある時は天津の南京路にある食品店のチラシをもらった。チラシには「……十二種類の違ったピザ(比萨饼)」と異国風味の日本のお焼き(日本焼)を「ご賞味ください……」と書かれ、五km以内は「免費送餐服务」(無料宅配サービス)をすると記載され、「手机」の番号が書かれていた。たぬしに電話をすると、愛想の良い青年が応対に出た。ピザの種類は八種類あり、一つ二十五元のピザを二つ注文してみた。それから待つことわずか二十分、出前の人がほかほかのピザを持って現れたのである。渋滞の中を宿舍から店までタクシーに乗って往復すれば最低一時間半はかかることを考えれば、たいへん便利に感じた。

「驛」―「站」―「駅」

高 明潔

さて天津へ来てから二週間ほどしてから、仕事の関係上、帰国の日まで携帯電話を持つことになった。その携帯電話には「摩托罗拉」と表示されており、いつかのタクシーの運転手の顔を思い浮かべた。また画面上に中国語の文字も表示されることから、説明書にはこの携帯電話の名称を「中文电话」と書かれていた。この「手机」を使い始めると、最初は四六時中響く音声を多少煩わしく感じたが、ある日、道端で携帯電話を持って中国語で大声で通話をしている自分自身の姿に気づいた。

帰国後、家内から携帯電話を購入入したいとの提案があった。しかし、天津のテレビドラマで見た「妻は携帯電話でお喋りをして、夫はエプロンをして食事の準備をする」シーンが頭から離れず、未だ購入するかどうかの決断をしかねている。

(愛知大学現代中国学部講師)

日本語の「駅」は中国語の「车站」の意味であり、古代中国では「驛」を用いて「站」を表した。また「驛」の読み方は「えき」であり、各種の字典の中においても繁体字（旧字体）の「驛」と書かれる。中国語の「驛」は、一般に古代における専ら公文書を送り届ける人員および行き来する官吏ために設けられた臨時の滞在場所であり、また乗用の馬匹や車両を交替する場所を備えていた。現代中国の政府職員のために設けられる「招待所」や「办事处」（事務所）などと類似している。

「驛」は一般に「驛道」を繋ぐ道中各所に設けられていた。「驛道」は古代の「驛馬」（駅馬、宿場馬）や「驛车」（車両）が通行するため

に開かれた古代交通における幹線道路である。道中に設けられた「驛」（駅、宿駅）ごとに「驛長」（宿駅の長）が置かれ、主に各駅間の期限を切って任務を遂行させる傳達事項を主管し、馬匹の交替つまり車両の供給の責任を負っていた。こうした駅伝制度の確立に伴い、「驛長」も中国古代における官職の一つとなった。古代における「驛長」の名称は時として「侯史」と呼ばれ、唐代（六一―八九〇七）には、「驛長」を「驛官」、「驛吏」と称し、並びに「水驛」、「陆驛」が設けられていた。「水驛」は現在の「港口」（港）・「码头」（埠頭）に相当し、「陆驛」は現在の汽車の駅やバスターミナルなどを含む「车站」（駅）に相当する。明清時